

寄稿

自分の地域を自分たちで楽しむ、 人を育てるアイデア提案事業

鹿児島県南九州市 「まちづくり大相撲」

南九州市の概要

鹿児島県の薩摩半島南部にある南九州市は、人口3万0656人、高齢化率43・1%で若者が急速に減少している地域です。お茶をはじめ農業や畜産業が盛んな地域ではありますが、人口流出が激しく、歯止めをかける対策に苦慮している状態です。

本市には229の自治会（集落）があり、その住民自治組織を20地区公民館が取りまとめています。各地区には社会教育上の条例公民館がありましたが、令和3年にその全てを市長部局に移し、地域づくりのできるコミュニティ・プラットフォーム（地域運営組織）として組織改革を行っています。

令和元年ごろから住民が集まって対話を重ね、地域の長期振興計画を策定し、できることをできる人が活動し、住民が

活躍できる地域づくりを目指して、集落支援員が中間支援に入りながら進めてきました。このコミュニティ・プラットフォーム構築を行うなかでその基本にあるのは、今住んでいる人々が自分の地域を好きになり、地域での生活を楽しんでいることではないかという考えに至りました。この取組は手上げ方式で補助金を交付して進めてきましたが、思うように話し合いが進まない地域もありました。

住民主導の地域づくり

そこで行政主導ではなく住民が地域のこと、により積極的なアイデアを出し合い、競い合うしくみを創ろうとしたのがこの「まちづくり大相撲」です。

毎年、年度初めに地区活性化のアイデアを募集します。そのアイデアを内外の審査委員が審査（①新規性・独創性、②



各賞受賞地区の方々



まちづくり大相撲の表彰式

テーマ設定の妥当性、③実施体制の工夫、④将来性）し、横綱から前頭までの賞を決めます。各賞には35万円から10万円までの賞金が授与されます。賞金は提案したアイデアの実行の他、地区で自由に活用できます。年度末には活動成果をデジタルで作成した映像等で評価（①先駆性・独創性、②実施体制、③波及性、④持続可能性、⑤総合評価）し合い、10万円から3万円までの追加賞金が授与されます。その中の事例をいくつか紹介します。

事例紹介①

定住環境の整備

（空き家の活用と子育て支援の充実）

この地区は前年度に空き家調査をした



空き家対策に関する住民への説明会

ところ、空き家を放置している家庭や今後の空き家対策を全く協議していない家庭が多いことが明らかになりました。そこで地区公民館に定住促進部を設け、空き家の賃貸、譲渡の可能性、空き家の管理者に対する賃貸・売却の啓発、移住希望者の把握など空き家対策と定住促進を一元的に取り組む体制を「まちづくり大相撲」によって整えることとしました。相談窓口では空き家バンク、家財道具の処分補助、空き家解体に対する市の制度などの周知を図ります。定住のための環境づくりとしては、子育て家庭が安心して生活できるように放課後児童クラブを創設する他、地域行事に子どもや保護者が参加する環境を整えていきます。

令和7年度で小学校が閉校するこの地域では、令和2年度から住民による地域づくりについて協議を始め、お助け隊や環境整備隊などの住民活動グループを立ち上げ、定住促進に向けた取組へと発展してきています。

事例紹介②

耕作放棄地をどう活用するのか

（新規就農者を呼び込む）

稲作を主体に農業法人を立ち上げ、長年住民主体の地域づくりに取り組んでい



耕作放棄地対策委員会

る地域ですが、高齢化により若い世代に繋がっていないという悩みをもってきました。合わせて行ってきた移住者対策で転入してきた新規就農者が主体になって、耕作放棄地を活用した新しい農業の在り方を探る事業を「まちづくり大相撲」として提案しました。生活スタイルが変化する中で、農業経験のない人でも楽しみながらできる農業や共同体でサポートし合える農業のしくみを整えようとして取り組んでいます。

事例紹介③

在住外国人と住民との交流

（浴衣を着て夕涼み）

お茶農家が多いこの地区には、技能実



夕涼み交流会での浴衣の外国人実習生

習生として多くの外国人が住んでいます。この外国人と住民の交流の場を持つとうと「夕涼み交流会」を「まちづくり大相撲」に提案しました。日本の文化を楽しんでもらおうと、浴衣を着てかき氷を食べたり花火や射的を体験したりと、昔ながらのイベントを住民と共に楽しむことができました。実行のためには公民館役員だけでなく、多くの若者や関係機関も協力する体制を整えることができたので、今後の公民館活動の推進にも役立ちました。「若い世代が地元に戻ってこない」という簡単には解決できない悩みを持つ地区ですが、まずは住民が自分たちの地域を楽しむことから始めていこうと取り組んでいます。

事例紹介④

地域を盛り上げる関係人口づくり

（地域内外の人材発掘）

地区民総参加型を基本とするこの地区は、かつて青年団活動が盛んでした。コロナ感染の影響で地域活動が休止になりました。復活のための人材確保が課題となりました。そこで、地域の伝統行事や新たなフェスタを実行する「イベント部」の創設を提案しました。加えて市外に出ている地元出身者にSNS等を通じて情報発信を行い、地区の行事に合わせて帰省を呼びかける「ふるさと応援隊員」活動も同時に提案しました。お盆時期に帰省する人々やマラソンや駅伝好きの人々がイベントに参加してくれることで、地元で日々活動に取り組んでいるスタッフの励みにもなりました。この取組は毎年世代を変えて連絡を行い、故郷を離れて生活している人々と残って頑張っている人々をつなぎ、様々な形で関係人口を増やしていくとするものです。

成果と課題

「まちづくり大相撲」の賞金は地域活性化を目的とすることから、市内業者で使用するれば何に使ってもよいとしています。各地区では提案に向けての話し合いを活発



関係人口で盛り上がる地区フェスタ

に行っている地区が増えてきましたが、協議体制がうまく整えられない地区もあります。地域づくりはそこに住む住民がやる気にならなければ進みません。しかもその人数が多くなればなるほど活動へのエネルギーも高まります。そのベースにあるのは地区公民館の組織体制であることを考えると、今後も各地区の特性に合わせた支援を継続していく必要性を感じています。

（南九州市まちづくり推進課

集落支援員 齋藤博）